

特集 散らかし

●出典…「育てる」通巻203号 昭和60（1985）年5月25日発行

ダンボール箱三つと十二個の差

青木 孝安（育てる会理事長）

「ちらかし」というテーマは、これほど気軽に書け、また逆にまとめの持つて行きようのないものはない。とにかく、私の身辺の子どもたちのことについて書こう。子どもたちと生活していると、「ちらかし」について悩まされることがきわめて多い。

その最たるものは、突然視察者たちが私共の施設を訪問した時である。来訪客に、子どもたちの部屋を見せてほしい、といわれた瞬間、笑顔をつくって、「どうぞ、どうぞ」といいつつも心の中では、「よわったな、

このところ整理整頓をうるさく言っていない。きつとひどいさわざだらうな」と思いつつ客を案内する。

「えー、ままよ」と開き直り、部屋の戸を開ける。「こういう所で子どもたちは生活しているのです」と説明する。案の定、目を覆いたくなる惨状？が展開されている。「いやー、今朝は起床を急がせたものですから、ちよつと片付いていませんな」と弁明する。すると客は、

「今時の子どもは、どうも整理がにが手のようですね。まあ、こうやってみますと、整理のできている子もいますね。小さい時からのしつけですから、急に直せといたつて無理でしょうな」と、なぐさめてくれる。さて翌日の朝会の時である。ラジオ体操がすんだ後、



子どもたちに、

「昨日、大勢のお客様が見えて、君達の部屋に案内した。いやー、はずかしくて、顔がまっかになっちゃった。なぜかわかるか。」

「部屋が汚れていたの。わかった。整理ができていなかったんだ」と三年生の子ども。

「バジャマは脱ぎっぱなし、パンツやシャツはころがつている。本は読みっぱなし、ありゃー、人間の住む所じゃないよ。はずかしくて、穴があいたら入りたかつたぞ。きつとお客様は「ひどいなー」と思ってたに違いないぞ。だから今朝は、みんな食事のテーブルについた時、君たちの部屋を見まわって、それでもまたちらかっているものは、回収してしまうからな。」

しーんと静まり返って食事をしている途中、

「さあーて、部屋を見せてもらうか」といって、私は席を立ち階段を上った。

子どもたちの部屋を一巡した。こんな時は片付いているに決まっている。「せめて昨日、こうなっていたらなー」とくやみながら階段を下り食堂にもどった。

私は中学生達のテーブルに座って食事を始めた。

「なあ、きちんと整理された部屋は気持ちのいいもんだぞ。君達は、そういう気持ちのいい部屋というものを知らないんだ」といってやった。すると、

「でもねえ、あんまりきちんとした部屋って、私はいやだな。何か、落ち着かないよ。やつぱり、適当にちらかっていた方が、なんとなく親しみが持てるよ。」

私は内心「それもそうだな」と思った。そしてさらに、その中学生はしゃべり続けた。

「そりゃねー、ちらかしいっていったって限度があるよ。そうそう、A君くらいがちょうどいいよ。まああの子が標準だね。人に迷惑かけないし、第一、自分で困らない程度に、ちゃんと整理できているから。BとCはだめ。ちょっとひどいよ。Bにいたっては、こりゃもう最低だね。」

面白いことに、子どもたちは、お互いに各自の整理能力について認め合っているようだ。集団生活というのは各自の性格を、無意識のうちに教え合うという特性を持っている。このことは最近の学校生活ではますます乏しくなっていると思うし、少人数の核家族にあつてはなお更のことであると思う。

さて、話をちらかしのことにもどすと、要するに、ちらかしの指導とは、指導者と子どもたちの根気比べの闘争であると思う。ひるまず、たゆまず闘い続けることである。そしてまた、指導者は努力の成果を期待しないことである。いくら叱り注意しても、だめな子はだめなのである。それでいいと思う。時期がくるまでどうしようもないのである。指導の効果はあきらめても、そのように努力している指導者の姿、姿勢が、子どもたちの中に刻まれていく。それが大切なことだと思う。

一口に、ちらかしといつても、ちらかしには、落とし物、忘れ物が多いという周辺効果？をとまなっている。要するに、いろいろな要素を包み込んでいるのである。例えば、その子の整理能力を超えた品物を与え過ぎていることも考えられる。衣類、学用品の与え過ぎである。整理能力とは自分の所有物の管理能力のことである。一年生には一年生の、二年生には二年生の管理能力があるはずだ。それぞれの子どもの管理能力に合った範囲で品物を与える必要がある。

山村留学を終えて、いよいよ親もとへ帰る日、子ども

もたちの日用品がダンボールにつめられ、広間に並べられる。

「なんだ、たったこれだけか。ダンボール三つだけ。よくこれで足りたね」と、これは四年生の男子。

「なに、こんなにあるの。ダンボール十二個か。どうしてこんなにあるの？」

「だって、家から送ってもらっているうちに、こんなにたまったの」と。これは三年生の女子。

品物の少ない子ほど、ちらかしや忘れ物、落とし物が少ないし、品物の多い子ほど、ちらかしや落とし物、忘れ物が多い、ということも一つの傾向である。

かつては、乏しく貧しかった日本人は、経済的豊かさを求めて、夜を日に繼いで努力を重ねてきた。その結果、いつの間にか、経済的に恵まれることが、人生の幸せにつながり、子育てにつながるという錯覚に陥ってしまったのではなからうか。そして、教育という崇高な愛情行為が、品物を与えるということに代行され、それに、惑わされてしまっているのではないだろうか。

●出典：「育てる」通巻203号 昭和60（1985）年5月25日発行

子どもの散らかしを考える

中川 瑞穂（育てる」編集委員）

「上はそろ、中は三寸、下は五寸、下下は股一ぱい」ということばをどこかで聞いたことがある。これは、玄関での履物の脱ぎかたについて言ったことばである。上手な脱ぎかたはそろ、つまりきちんと揃える。中は三寸、下は五寸も左右が離れている。下の下は股幅いっぱいくらい離して脱ぎ捨ててあるということらしい。

むかしから、その家の躰は玄関の履物のようすでわかるといわれている。当たらずとも遠からず、学校で家庭訪問をするときなどその感を強くする。

話題が少しそれるが、子どもの基本的生活習慣について、福武書店の教育研究所で調査した結果の一部を紹介してみたい。調査は、小学二、四、六年生で、調査項目は自分の身の回りのことを子ども自身でどのくらいしているかということである。

定着率の高い順は、ねまきを着てねる。朝の洗顔。自分で時計を見て登校する。汚れた物を洗濯場につけて

いく。かばんやランドセルを決めた場所に置く。以下に続く。ここで脱いだくつをそろえるの項を見てみよう。十五項目のうち、十四番目である。定着率は二年生で男〇・七割、女二・三割。六年生は男一割、女一・一割である。

子どもたちの身の回りには、自分でしなくてはならないことがたくさんあるが、できそうでできないものの一つに、履物をあげることができる。

ところで、本題の「散らかし」であるが、これは履物の脱ぎっぱなしと同様であるように思う。

以前わたしは、父母会の席上で子どもたちの生活を見ていて気になること、困ることは何かと聞いてみたことがある。その第一は、自分の物がきちんと片付けられないことだという返事が圧倒的であった。どうやら家庭で親は、散らかしの問題で頭を痛めているようである。

先日、朝日新聞に「子ども部屋の掃除に思う」というある母親の記事が紹介されていた。

『日曜日、ついに中二の息子の部屋の掃除をしてし

まった。今年初めての掃除なので、お昼から夕方までかかった。「掃除したらどうなの」「するよ」の繰り返し。でも実行はしなかった。自分の部屋は自分でするのは当然だし、自ら掃除する気の起こるのを待っていた。

部屋は乱雑をきわめていた。教科書や参考書、趣味の本、それにもどつてきたテストや学校のプリントが、三つの小山になって積み上げられている。整理ダンスが片開きになって靴下がぶら下がっている。ケースから出たテープ。サイクリング用自転車と修理用具。よくもこれだけ散らかしたものだ。

さぞや学校の忘れものも多いでしょうと聞くと、僕ほど忘れものをしないものはないという。自分の置いた場所は知っているので、案外不便は感じていないのかもしれない。マスクをして大奮闘をしている間、息子はきれいな部屋で友だちに借りたギターをひいている。掃除が終わったら、お母さん大変だったねといった(後略)

少しだけ紹介しようと思ったのがついつい長くなつてしまった。というのは、中二の男の子と母親とのかわりが、部屋の掃除をめぐつて、生々しく書かれて

いるからである。このくらいの年齢の子どもを持つこの家にも見られそうな情景である。それだけにこの記事は多くの事をわたしたちに教えてくれている。

履きものの脱ぎかたと、部屋の掃除について紹介したが、このほかにもたくさんさんの例があると思う。いずれも基本的生活習慣として、子どもたちが身につけておかなくてはならないことであるが、どうやら現実にはあまり期待がもてないようである。では、そのまま放置していてよいものだろうか。親はもとより、多くの大人は程度こそちがうが、決して望ましいことだとは受けとめないと思う。では、どのようにしたらよいだろうか。

大人は、よく子どもたちに「整理整頓」をしなさいと注意する。子どもの多くは言われたとおりに片付けたり揃えたりする。しかし、見ていて子どもたちは決して喜んでしない。言われるから仕方なく渋々と、子どもによつては不満そうなふくれた顔をしてなんとかその場をつくろう。

本来子どもたちは、このようなことがが手なのか

嫌いなのか。決してそうではないと思う。これにはいくつかの問題があるような気がする。一つには、「整理整頓」ということである。整理というのは、ものをきちんと在るべきところに順序よく、無駄なく、つぎに使用するとき使用し易くして置くことであると思う。しかし、整頓はそれとは少しちがいで、きちんと見た目にもきれいに乱雑になつていないように整えておくことであるように思う。ところがこの二つのことばを同義語として使っている。子どもたちにとっては、くつであろうと学用品であろうと使用するとき困らなければ、見た目などどうでもよいのである。他人のことなど構わない。まして安全や保健などということは無頓着である。しかし、整理をしておけばよいということとは生活経験から理解できている。結局は必要感と価値観である。どうしてもしなければ、困れば、その方がより大切だと思えば黙つても実行する。ところが、もつと抵抗のあることは頭から命令される。自主性などはほど遠い結果になつてしまう。

中二の母親の記事の末尾に『掃除とは創造のない仕事だから、嫌いな人が多いと聞いた。でも、生活して

いくには掃除は最小限でもしなくてはいけない。息子の場合、幼少期からビシビシ掃除のしつけをすればよかったのか。甘いしつけの積み重ねがこんな掃除のできない人間にしてしまったのか。いまからしつけるのは絶望的だ。あきらめて、手を出さずか、ほつておくか、まだ迷っている』とある。

寺の小僧が和尚に「落ち葉を掃いても掃いても落ちるのでつまらない」と言つたところ和尚は「掃除は食事と同じだ。食べても食べても腹がすくではないか」と論じたと、いう。

どこの親も子どもに整理の生活習慣を身につけさせたいと思つている。そのとおりである。しかし、それには条件がある。子どもは大人をよく見ている。大人ができない、あるいはしないで子どもに要求してもだめである。大人も子どもも散らかしたつていい。いちばんたいせつなことは、だれかがそれを片付けるのではなく、いつしよに片付けることである。散らかす人、片付ける人が手分けであつてはならないということである。

整理のできない子

比留間 一成（千葉大学講師）

はじめに

この題を与えられて、大変気が重くなった。それは私自身大変整理ができなくて、小さいときから叱られてきたからである。今はさらに年齢のせいもあって、朝の外出時は、あれこれと家内に世話をやかせる。きまつていわれることは「整理がわるいからですよ」である。そのような私ではあるが、子どもへのかかわり方と環境とのかかわりについて、又これに付随して、発達上の問題を加味して述べてみよう。

1. 片付けのしつけはいつごろから

整理整頓の習慣は、清潔の習慣とならんでしつけにくいものとされている。これは子どもが「やらなければならぬ」と意識しにくいからである。叱られる、こわいからということでは身に付きにくい。又しつける側も案外本気でしつけようとはしていないことにも

よる。初期において、しつけのしにくい理由としては次のことがあげられる。

○しつける時刻

子どもが片付ける時刻は夕方ごろで、親はちょうど夕飯の支度、せんとく物の取り入れ、掃除などで仕事为重なり気ぜわしい状況にある。また親子とも空腹でイライラしていて、そのためしつけるより叱ったり、罰したりしがちなことが多い。

○幼児の心理

片付けのしつけは、四歳ごろからが多いが、このとしごろは、外で遊んだり活動したりすることに関心が高く、いろいろなものに興味があふれるようにわいてくるので、自分がやったりつかったりした用具、道具を片付ける余裕がないというのが実情である。この点五歳になると少々判断も見えてくる。

○片付けのための場、用具

片付けても、片付けがいのない場所であったり、用具が適さない場合が多い。モンテッソーリはこの点を指摘しているが、いくつかの例をあげてみよう。

・下着類の整理ダンスは、子ども向きなのが少な

い。子ども向きのものといえば、食卓と椅子なども同様のことで、からだに適合しないと、子どもがいやがりその気にならないのも当然であろう。

・片付けにともなつての清掃用具。これも子どもが使いやすいものが少ない。

このように指摘されると、子どもがすすんで整理整頓するためには、おもちゃ箱一つとりあげても、それ向きに工夫されていなければ、このしつけはつけにくいと考えざるを得ない。

○持ち物が多すぎないか

今は子どもといえど、なかなかの物持ちである。衣類にしても、流行を取り入れるので数が多い。おもちゃも高価なもの、大きなものなど種類も数も多いので、このあたりのコントロールも、片付けのしつけにかかわりが深い。

しつけは何といつても幼児期に基盤があるので、これも計画的に息長くしつけるべきである。親の姿でなるといわれると背に冷汗が流れるが、やはり親の考えや態度、姿もこのしつけには大きくかわつていよう。

2. 片付けのしつけの留意点

しつけにくい理由はわかったが、さて、となると腰が重い。片付けのしつけは親もかなり本腰をいれなければならぬからである。又各家庭により状況も異なるし、考え方もちがうので、留意点を挙げることにする。

(1) 順序をおってしつける

世の中で仕事をするときには、その手順が大切で、このことから作業の手順を流れ図にして示している。家庭でも、片付けの順について、わかりやすく示す必要がある。

①簡単な片付けは、三歳ごろから興味をもつので、はじめは親がやつてみせることに重点を置き、つまり姿でみせ、毎日一定の順序で、「絵本はこの印のある棚に、おもちゃはこの箱に」といいながら、子どもに手伝わせて片付ける。

②四歳をすぎたら、だんだんに役割をつけて、「本はあなたがやることにして」とはつきり仕事の内容をわからせて、責任をもたせる。ここで注意なくてはいけないことは、四歳児では半分もうまうまいかなということである。そのため、ときどき

声をかけて、「片付けはうまくいつている」とげきれいをするのがよい。又うまくいつていたら、その事実を認めて「できたね」とほめるようにする。五、六歳になると、何をどうとか、何をどこへとか形式的なことはのみこむが、うまくはいかないのが普通である。完全にひとりで行けるようになるのは、小学校の低学年からであるので、この点あせらずに親の方で努力する必要がある。

(2) 片付けは遊びとして楽しくやる

片付けは、案外幼児にとつて楽しい遊びになる。子どもは親といつしよだとそれだけで楽しいので——もし楽しくなければ、その辺から考えなおさなくてはならない——親は、是非時間のやりくりをつけて、子どもとの片付けの時間を持つようにしたい。ゆつたりと楽しいムードで一緒に片付けるようにしたい。終わつて「きれいになつたね。さあ食事にしよう」と喜べば、子どもにも楽しい時間となる。

① 片付けは、数の学習の機会

片付けには、分類、集合、対応、順序など算数の基礎となる考え方が含まれている。おもちゃな

どで、木でできたものとそうでないものとか、色のあるものないものなどとか、片付けるとき分類してみると子どもは楽しむ。

② ことばかけに気をつけて

生活語が学習の基礎であるので、片付けのしつけと考えると気が重いが、親子の会話の時間とでも思えば、会話を楽しむことができる。

・食事の後片付けなど、盆にのせて運んでもらったり、台所まで運んでもらつたりしたときなど、「たすかつたよ」ということばを、ごくろうさまとか、ありがとうとかの感謝のことばにつけていうと、自分が役に立つたという実感がわくようである。

③ 一日一回だけ片付けの時間を持つ

「表へいくならきちんとしてでかけなさい」とか「一つ片付けてから一つ出しなさい」とか「また散らかして」などといちいちうるさくいうと、けつきよくは子どもを「片付け」から遠ざけ、親がいつのまにか片付けているという結果になるようである。ある親は、次のようにして効果を上げ

たという。

- ・ 一日一回、夕食前とか、夕食後とか、時間をきめて、ほかのときはうるさくいわないこと。
- ・ なまけて全然しないときでも、叱るより「きのうはよくできたわね」と意欲を起こさせるようにする方がよい。

3. 日ごろの親子の信頼関係やかかわり方による

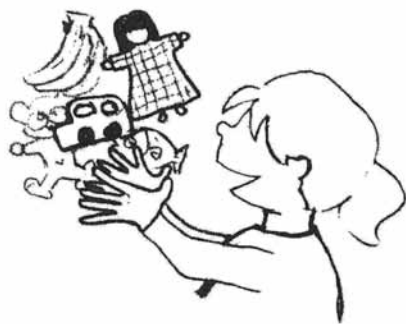
幼児から小学校の低学年の子を対象に基盤になることを述べたが、しつけを十分しないで大きくなつてしまった子はどうするか、が問題になる。大きくなれば、それだけいうこともきかなくなるし、整理の内容も異なってくるのは当然といえよう。このためには、次の点に留意をして努力するしかないであろう。

○よく話し合い、片付けの内容、場、用具などたしかめ合つて、合図することであまりよくいうようにとりきめをつくる。つまり、大きくなつたら、その分だけ知性が発達しているので、それにうったえ理解し合うことが大切である。

○これに合わせて、一家を挙げていらない物を整理す

る日や時間を持つこと。

このように考えると、整理整頓は、子どもだけを対象とするのではなく、一家全体が住みよく快適な生活をというように考えることが基本となろう。いうはやすく、行うは難しで、努力のいることである。



再掲載を受けて――

散らかしに関わる体験の大切さ

今野 公彦（現・山村留学指導員）

『散らかし』は育てる会の職員として、また二児の父として、とても身近にあるテーマです。自分の生い立ちを振り返りながら散らかしについてお話をしたいと思います。

私は三兄弟の長男として生まれました。散らかしについての記憶があるのは、幼稚園児の時からです。二歳と四歳離れた二人の弟たちと喧嘩の毎日で物や場所の取り合い、見たいテレビ番組ややりたいテレビゲームが異なり、言い合いをしていました。両親はそんな私たち三兄弟の面倒を見るのは大変だったろうな、と想像します。そして、当時の実家がどの様な状況だったかを思い返してみるといつも家中物が散らばっていました。両親に片付けなさい、と言われていたのも覚えています。

幼稚園児まで片付けが出来なかった私に小学一年生の時に転機が訪れました。小学校の上級生に誘われて、ハンドボールのクラブチームに入団したことです。全国大会でも優勝経験のあるチームと知ったのは、入団後でそれから週四回、放課後や週末に練習に励む日々が始まりました。

クラブチームで学んだことは、ハンドボールの技術はもちろんですが、それよりも印象に残っていることがあります。それは自分の物を大切にして、責任持つて管理することです。ボール、シューズ、練習着、テーパー、水筒、ユニホームなど競技に必要な物は沢山あります。物を自分で管理することが、スポーツ選手の基本だと教わりました。練習や大会で忘れ物があると、選手として信頼されません。どんなに良い選手でも物の管理ができないと試合に出られない厳しい世界でした。実際に忘れ物をして試合に出られない経験もしました。そのような環境だったので、物を片付けたり、整理したりするのが習慣になりました。自分で物の管理をすることは大変でしたが、強い選手になるための習慣として教わる事ができた環境に感謝をしています。

もう一つ、散らかしに関わる体験の中で印象に残っている出来事があります。小学五年生の時の育てる会のサバイバル班活動です。同級生の紹介でサバイバル班活動を知り参加しました。それまでのキャンプのイメージは、好きなお菓子やおもちや、漫画を持って行く、修学旅行の延長のようなものでした。そして、キャンプに必要な道具は主催者側が準備するといった感じです。

手元に届いた参加のしおりを開くと、必要最低限の物でキャンプするので、不要な物は持つてこないと書かれていました。そして、ナイフ、キャンプ用食器、ヘッドライトなど個人で使用する物は勿論、ありとあらゆる小物まで自分で用意することになっていました。自分でキャンプ用品を揃えたことがなかったので準備の為に両親と色々なお店を回った記憶があります。

サバイバルキャンプでは、それらの荷物を自分の力で背負って歩きました。必要最低限の物だけを入れても、荷物は重くて歩くのが辛かったので、もし、自分の好きなものまで入れていたら歩くことさえできなかったな、と感じたのを覚えています。参加者は上級生ばかりでみんな持つてくる荷物も少ない熟練者でした。自然の中か

ら物を創り出したり、お腹が空いたら木の実を食べたり、魚を釣ったり、嫌々、虫を調理して食べたのも良い体験でした。物に溢れた生活から解放されて、必要最低限の物で生活することの心地良さを体験しました。また、遊びや必要な物は工夫すれば生み出せることも学びました。

サバイバルキャンプが終わってからは、普段の生活の中で少しずつ不要な物が減り、散らかしの頻度も減っていたことを覚えています。同時に自然への興味が湧き、キャンプ、ハイキング、虫取りなどに夢中になりました。

山村留学の指導において、子どもたちが散らかしたものを片付けることはお互いが気持ち良く集団生活を送る上で必要不可欠だと思います。私を含めスタッフ一同、片付けができるようになってほしいという思いで日々声掛けをしています。しかし、私がそうであったように、口で指導することも必要ですが、子ども自身が散らかしに関わる体験を積み重ねることが大切だと思います。その体験が心に残り、片付けの習慣が身に付くことに繋がると思います。そのことを念頭にこれからも子どもたちの山村留学生生活をサポートしていきたいと思っています。